

梅枝の巻の「前の朱雀院」について

— 史実と物語との関係 —

藤河家 利 昭

始めに

梅枝の巻の薰物合わせでは、明石の御方の合わせた薰物の由来が次のように書かれている。

冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれんもあいなしと思して、薰衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩の方など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集めたる、心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。

(梅枝 三・四〇一)^(注)

この「前の朱雀院」が誰を指すのかについて、主として現代の注等では疑問の余地は残しながら宇多上皇と取つてゐる。一方、古注では朱雀天皇と取つてきた。この問題は、物語に登場する朱雀院との関係にも波及してくる。また、『源氏物語』が史実と物語との関係をどう捉えているのかをも示しているように思われる。

一 「前の朱雀院」について

まず、「前の朱雀院」が誰かについて、古來說が分かれている。現代の注釈等では宇多上皇とされている。^(注2) 例え次のように説かれている。

宇多天皇も、讓位後に朱雀院と称せられたことがある（古今集）。この物語では、今の朱雀院（源氏の兄宮）に對して、實在の宇多天皇を前の朱雀院と呼ぶらしい。^(注3)

しかし、宇多上皇とした場合、特に薰物を嗜んだようには見えないことをどう考えたらよいのであろうか。この取り方は、「うつさせたまひて」の主語を物語の朱雀院と取り、それが史上の朱雀院と重なることも関わっている。

誰がうつしたのかについては、一つには、物語の朱雀院とする説がある。^(注4) これには次のような理由が挙げられている。

「さきの朱雀院のをうつさせたまひて」と二重敬語だから、主語は、帝か院である。それを明記しないのは、明記しなくともわかるはずという態度ゆえ、「いまの朱雀院」と考える。（公忠の仕えた朱雀天皇は）物語の中の朱雀院、源氏の兄の上皇とイメージが重なってくるのである。^(注5)

主語は今の朱雀院（評釈）。綜合卷で秋好中宮（前斎宮）に格別な薰衣香を贈っている。^(注6)

二つには、「史上の朱雀院」^(注8)、「延喜承平などの御代」^(注9)とする説がある。

そのうへ此物語の朱雀院、すなはち承平ノ御門に准へたるを、前の朱雀院と申すべきよしなし、^(注10)

日本古典集成は、「(朱雀院が) お学びあそばして」とし、「この物語では、史上の朱雀院と物語の朱雀院が重なるように書かれている」^(注1)と説かれているので、二つの中間と見ることができるといえる。

これらの説では、「前の朱雀院」を宇多上皇と取り、物語の朱雀院に対して区別している。しかし、一方では、いずれの説においても物語の朱雀院と史上の朱雀院とが重なりと説かれている。そして、それが「前の朱雀院」を宇多上皇と取る根拠の一つになっているようである。例えば「源氏物語事典」には次のように説明されている。

「さきの朱雀院」をいわば歴史的呼称として宇多院を指すものとすれば、問題は一応落着くが、この物語の今の朱雀院に対して「さきの朱雀院」といったとすれば、問題はやや複雑になる。しかし、物語の朱雀院は、仮作人物であると同時に、その準拠を史上実在の朱雀院、いわゆる承平の帝に求めるのが旧注の所説であり、裏付けとなり得る一二の材料もあつて、この準拠説は一応認め得る。さすればこの「さきの朱雀院」を、承平の帝に持つて行く必要はなく、宇多院として論理的に落ち着く。^(注12)

これは、「源氏物語」では史実と物語とが重ねられているという考え方とも言えるであろう。しかし、絵合の巻における「薰衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにとのへさせたまへり」(二・三六〇)というように、朱雀院と薰衣香との結びつきの深さはあるとしても、先の文の中に朱雀院のことを指示する語はないのである。また、ここで物語の朱雀院が出てくる必然性はあるのであろうか。さらに、ここで物語の朱雀院と史上の朱雀院とが重なることがどのような意味を持つのであろうか。ここで言いたいことは、物語の朱雀院と史上の朱雀院とが重なることなく、明石の御方の合わせた薰衣香が前朱雀院の方に由来するということである。

これに対して、「河海抄」は次のように取っている。

古今集に朱雀院とあるは亭子院也仍此さきの朱雀院も寛平の御事たるへき歟しかれとも若此物語の朱雀院よりさ

きといふ心歟承平の聖代男イ(真本記)合香を好しめ給よしみえたり

公忠朝臣

号滋野井弁 右大弁従四位下 廿八日卒六十 光孝天皇御孫

天曆二年十月 大藏卿国紀子

高名薫物合好手

也云々延喜天慶間右大弁公忠朝臣藏人所小舎人大和常生相並奉合香之役

(梅枝 四四四)(注15)

「朱雀院」の呼称から「前朱雀院」を宇多上皇かとしながらも、この物語の朱雀院より先という意味かとした上で、朱雀天皇が合香を好んだことを上げている。また、公忠朝臣は醍醐・村上両天皇の時代に大和常生とともに合香の役を勤めたことも上げ、朱雀天皇と公忠朝臣との薫物を通しての関係を重視している。なお、これについては、「薫集類抄」では、「件常生、延喜聖代与公忠朝臣同時相並、奉合香之事者也。」(上・五三二)(注14)とあり、朱雀天皇の時代のことではない。

【花鳥余情】もほぼ同様である。

前朱雀院は承平御門の御事也 西宮抄臨時部云前朱雀院初出大内之時乘金飾檳榔云々 此前朱雀院は宇多御門の

御事也 承平御門を朱雀院と申につきて宇多天皇をは前の字をくはへて申侍り 此物語には又朱雀院ましますに

よみて承平の御門を前朱雀院と申也 此御時に公忠朝臣薫物方なとたてまつりし故也

(二四〇)(注15)

史上の「前朱雀院」を宇多上皇とした上で、この物語の朱雀院に対して朱雀天皇を「前朱雀院」としている。また朱雀天皇の時に公忠朝臣が薫物を献じたとしている。この前の部分でも、「公忠朝臣もその世につかへてあはせかうに達したる人也」として、公忠朝臣が朱雀天皇に仕え、合わせ香の名人であることを指摘している。例えば史上の「前朱雀院」が宇多上皇であつても、物語の朱雀院からすれば朱雀天皇も「前朱雀院」になる。物語の朱雀院と朱雀天皇がそのまま重なるとは見ていないのである。両抄ともに、史実との関係を考慮しながらも、当然ではあるが、物語の朱雀院の存在を独立したものと見ている。即ち、物語の論理が優先するという考え方である。

源公忠の経歴については、『源氏物語事典』上巻が詳しい。朱雀天皇以後の時代に関しては、「朱雀院に再び出仕、

藏人に補せられ、承平三年正月山城守を兼ね。天慶四年近江守。同六年右大弁、同八年依病辞右大弁。同九年紀貫之、臨終の歌を公忠に寄す。天曆二年十月（一説、天慶九年）卒、六十歳^{（注16）}とある。

二 物語の朱雀院、史上の朱雀院

「前の朱雀院」について、先に引用したように、「河海抄」は「承平の聖代合香を好しめ給よしみえたり」としてゐる。また、醍醐・朱雀両天皇の時代に公忠朝臣が大和常生とともに合香の役を勤めたことも上げている。『花鳥余情』も、朱雀天皇の時代に公忠朝臣が薫物を献じたことを、「前の朱雀院」が朱雀天皇であるとする拠り所にしてゐる。朱雀天皇の略歴については、『本朝皇胤紹運録』^{（注17）}に見える。

『源中最秘抄』上には、「薫物合高名人数」として、仁明帝（承和御門）について朱雀院を上げている。その他、関連するところでは、八条式部卿宮、右大弁宰相公忠、藏人所小舎人大和常生等の名が上がつている^{（注18）}。『薫集類抄』上には、朱雀院の薫物の方として次のものが上がつている。

（侍従）

朱雀院。東三条院用之。

沈四両。丁子二両。甲香一両。甘松一分三朱。馨陶一分三朱。已上小。

右方。自天曆御時所令伝給也。云々

（五三二）

（黒方）

朱雀院。東三条院用之。

沈四両二分。薫陸一分。白檀一分。丁子二両。甲香一分。麝香一分四朱。已上小。（五三四）
また、「和合次第」のところにも名が出ている。

朱雀院。 沈。 丁。 甲。 薰。 麝。

(同抄下 五四八)

なお、『河海抄』には、薰衣香について諸方を上げる中で朱雀院の方を上げている。

沈小四両二分 薰小一分 檀小一分 丁小二両 甲小二両 麝小一分四朱 又

沈小四両 丁小二両 甲小一両 甘小一分三朱 簪小一分三朱

已上朱雀院御方也

(四四四)

ただ、これは『薰集類抄』には見られない。また、『河海抄』は、『荷葉方』として「天慶六年二月廿一日甲午公忠朝臣所献之」(四四三)と言っているが、『薰集類抄』上では、同じ荷葉のところに「公忠朝臣。天曆六年二月廿一日甲午進之」(五二九)となっていて、村上天皇の時代となっている。

なお、公忠朝臣と薰衣香との関わりについては、「薰衣香。一名蘇身香」としてその名を上げ、また「洛陽薰衣香出淳和院。但公忠朝臣所献也」(上・五三六・七)という記事が見える。その他、天皇に献じた薰物としては、先に触れたように荷葉を村上天皇に献じている。

資料は少ないが、「前の朱雀院」は、古注の言うように薰物の名人として宇多上皇よりも朱雀天皇の方が妥当と考えられる。しかも公忠朝臣との関係からしても朱雀天皇がふさわしい。そうすると「前の朱雀院のをうつさせたまひて」をどう考えればよいであろうか。この部分は、『源氏物語大成』に次のような異同がある。

【青表紙本】すさく院のを——朱雀院の横

【別本】さきのすさく院のをうつさせ——さきのすさく院のことそへさせ保——前朱雀院のをしへさせ表阿

これによれば、或いは「前の朱雀院」、即ち朱雀天皇がおうつしになってと取ることも出来よう。元のままの本文で

あつても、朱雀天皇の方を天皇自身がおうつしになつて、又は朱雀天皇の方を天皇が公忠朝臣にうつさせなさつてと取ることも出来る。石田讓二氏は、「前の朱雀院」を宇多院と取られているが、この部分について次のように述べられている。

公忠が特に入念に調査して、奉つたのは、天皇である。具体的には醍醐、朱雀兩帝のいづれかである。故にこの所は、たとへば、香をたしなむことで聞えの高い朱雀帝などが、名手公忠に命じて、「さきの朱雀院」の秘方を模して奉るべきことを命じられた、と読まなくてはならぬところである。^(註19)

「前の朱雀院」を薫物で名高い朱雀天皇と取る限り、天皇が公忠朝臣に命じてうつさせなさつたと取るのが適當であろう。「うつさせたまひて」は、「薰集類抄」が「百和香」について「寛平六年九月十日。八条一品宮於御前写給百和香方也」(上・五三八)とするように、写す、即ち「模して」とするのがよいであらう。

なお、「思ひえて」については、「公忠の撰置たる方を能分別してと云心に百ふのほうなと思えてとかく也」^(註20)という説がある。

「前の朱雀院」を朱雀天皇と取つた場合、物語の朱雀院が同じ薰衣香を前斎宮に贈つたことをどう考えればよいであらうか。

院はいと口惜しく思しめせど、人わろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、うちみだりの箱、香壺の筥ども、世の常ならず、くさぐさの御薫物ども、薰衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにととのへさせたまへり。

(総合 二・三五九―六〇)

朱雀院は、前斎宮入内の当日、多くの贈り物と様々な薫物、特に薰衣香は比類のない位、百歩の遠くまで匂うように念入りに調べて贈っている。薰衣香に、入内する前斎宮への特別な思いを込めているのである。朱雀院と薰衣香と

の結びつきは強い。梅枝の巻で、同じく明石の姫君入内を控えて調査される薫衣香もまたその元は朱雀院である。物語の朱雀院と史上の朱雀院とは薫衣香の調査者という点で重なってくる。そこで梅枝の巻では、むしろ物語の朱雀院に対して、史上の朱雀院を「前の朱雀院」として区別する必要があったと考えられる。なお、薫衣香が贈り物として用いられたことは、末摘花が九州に下る侍従に形見として、自分の髪を鬘にしたものとともに、「昔の薫衣香のいとかうばしき一壺」(蓬生 二・三三二)を加えて取らせていることから分かる。

物語の朱雀院と史上の朱雀院とが重なる例として上げられるのが次の例である。

年の中の節絵どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに描けるに、延喜の御手づから、事の心描かせたまへるに、またわが御世の事も描かせたまへる巻に、かの斎宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思しければ、描くべきやうくはしく仰せられて、公茂がつかうまつれるが、いといみじきを奉らせたまへり。

(絵合 二・三七三・四)

この部分について、物語の朱雀院は、醍醐天皇の次の天皇であり、従って史上の朱雀院と重なっていると言われている。^(註21)また、桐壺の帝を醍醐天皇になぞらえているとも言われる。^(註22)しかし、ここは自ずとおよそ時代を特定する意味はあっても、そのことに主たる目的があるのではない。朱雀院は、斎宮下向の日、大極殿の儀式が印象に強く残ったので、図柄を詳しく指図して公茂が描いて献上した見事な年内の節会の絵を梅壺の女御に贈った。それは醍醐天皇宸筆の事の次第に朱雀院も書き加えた巻である。そうすることによって始めて朱雀院は私的な女御へのかなわぬ思いを絵に込めることが出来たのである。そして、醍醐天皇自身が製作に関与した年中行事絵巻はそれを贈られた女御の地位に権威を添えることになる。なお、ここは朱雀院の女御への関わりが述べられているので、「わが御世のこと」として朱雀院自身が明確に出ているが、梅枝の巻では朱雀院が出てくる必然性がない。天皇又は上皇が指図して臣下が

奉仕するという君臣の關係は似ているとしても、この場合は、史上の朱雀院ではなく物語の朱雀院が独立している。

このように物語の朱雀院を醍醐天皇の次の天皇とするのは、桐壺の巻で桐壺の帝を宇多天皇の次の帝のように述べたのと同じ手法(手法)と言われる。その例にも触れておきたい。

このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ。
(桐壺 一・一〇九)

更衣を亡くした桐壺の帝は、明け暮れ長恨歌の絵を見、それを我が身に置き換えて更衣を偲んでいる。その絵は宇多上皇が描かせ、伊勢と貫之に歌を詠ませたものである。このことから桐壺の帝は、宇多天皇の次の帝であり、醍醐天皇になぞらえられると言われる。しかし、ここもおよその時代を特定することはあっても、醍醐天皇を指示しているわけではない。和歌にしても漢詩にしても長恨歌のような内容のことを日々の話の種にしている帝の姿をこれ以後具体的に示していくために、宇多上皇が直接製作に関与した長恨歌の絵とそれに詠まれた歌が導入の役割を担っているのである。むしろ宇多上皇という實在の帝に由来することによって、桐壺の帝は、物語の中で一人の帝として長恨歌のように私的な更衣追憶の物語の主人公となり得ると考えられる。

三 天皇の伝え

この明石の御方の薫物の由来を述べた記事と対応していると考えられるのが、源氏と紫の上が調合した薫物について述べた部分である。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけん、心にし

めて合はせたまふ。上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみにいどみ合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、「匂ひの深さ浅さも、勝負の定めあるべし」と、大臣のたまふ。

(梅枝 三二九六)

源氏は、仁明天皇御禁制の二つの方(黒方と侍従と考えられている)を、正統ではないようであるが、伝えている。それは男子に伝えてはならないとされていたものである。これに対して、紫の上は仁明天皇皇子本康親王の方(これは先の二つに梅花香が加わっていたようである)を伝えている。仁明天皇の御禁制からすればこちらの方が正統ということになる。両者の方は同じものではないが、本康親王は父仁明天皇の方を伝えていると考えられる。従つて、紫の上の方は仁明天皇の方に由来することになる。しかし、直接に仁明天皇の方としないで、その方を伝えた本康親王の方としたことが注意される。

明石の御方の場合も直接用いたのは公忠の方であり、前朱雀院の方に由来するということである。いずれも源は天皇にあるということであるが、それが由緒正しいものであるとしているのであろう。紫の上と明石の御方の薫物の由来が記されたのは、この薫物合わせが明石の姫君入内の準備のためであり、それぞれ養母と実母の地位を堅固なものにしておく必要があったと考えられる。そこで天皇との繋がりをおくことが求められたのであろう。ただ、紫の上が八条の式部卿の方を伝えているのに対して、明石の御方は朱雀天皇の方を模した公忠朝臣の方を思いついたとしている。ここに自ずと両者の格の違いを示しているのであろう。

明石の姫君入内の準備として、薫物合わせと対応するのが仮名の手本である。兵部卿の宮は、自邸にあった「嵯峨帝の、古万葉集を選び書かせたまへる四巻、延喜帝の、古今和歌集を、唐の浅縹の紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺の表紙、同じき玉の軸、綾の唐組の紐などなまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせた

まへる」(三・四二三)という嵯峨・醍醐両天皇の宸筆を明石の姫君の手本にすべく源氏に進呈している。三筆の一人である嵯峨天皇とともに醍醐天皇の名が上げられているところに、源氏にとって皇室に入る明石の姫君のためには当代の一品品であるだけでなく、天皇宸筆であることが重要であると考えられる。

ここで思い合わされるのが、明石の入道が大井に邸を伝領していたことである。

昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大井川のわたりにありけるを、その御後はかばかしう相継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人と呼ばとりて語らふ。

(松風 二・三八八)

明石の御方の母の祖父は中務の宮である。この中務の宮は、醍醐天皇皇子兼明親王(後の中書王)が擬せられている(『河海抄』等)。亀山の麓に隠棲したことから小倉の宮と号したことによる。また、「御莊の田畠などいふことのいたづらに荒れはべりしかば、故民部大輔の君に申し賜はりて」(同 三八九・九〇)とある故民部大輔は、兼明親王次男東宮学士、民部の大輔伊行が擬せられている(同)。こうして明石の御方の母方の血筋が中務の宮を祖とすることによって、明石から上京して源氏の許に行こうとする明石の御方の地位を強固にしておく必要があったと考えられる。おそらく明石の御方が思いついた朱雀天皇の方を模した公忠朝臣の方もこの中務の宮家に伝えられたものであつたろう。源公忠は光孝天皇の孫にあたるので、その薫物の方が宮の血筋を引く明石の御方の母方に伝わった可能性は高いのである。これは八条の式部卿の方を伝えた紫の上が式部卿の宮の姫君であることと対応しているであらう。『花鳥余情』は、「八条式部卿宮は紫上(ナメ)の父式部卿宮になすらへていへり」(二三七)としているほどである。

明石の御方の家の伝えとしては、他に箏の琴の伝授がある。

なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること三代になんなりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のこと

は棄て忘れはべりぬるを、ものの切にいぶせきをりをし、掻き鳴らしはべりしを、あやしうまねぶ者のはべるこそ、自然にかの前大王の御手に通ひてはべれ。

(明石 二・二三)

明石の入道は醍醐天皇の奏法を伝えて三代目にあたり、娘もそれを習い、結果として自然に「前大王」(醍醐天皇を指すとする説に従う)の奏法に似ている。これもおよその時代が分かることはあつても、時代を特定するためではない。明石の御方が醍醐天皇の奏法を伝えることによって、今から源氏と交わりを持つ明石の御方の權威を付与しようとしているのである。^(註4)源氏は、「嵯峨の御伝へにて、女五の宮さる世の中の上手にものしたまひけるを、その御筋にて、とり立てて伝ふる人なし」(同)と、一方では、嵯峨天皇直伝の女五の宮の筋には特に伝える人がいないと言っている。明石の入道については、「親、大臣の位をたもちたまへりき」(明石 二三五)とあり、「近衛中將を棄て」(若紫 一・二七六)ともあるように、大臣家の出であり、宮仕えもしているので、大臣が醍醐天皇の奏法を明石の入道に伝えたか、また自ら宮中において伝えられた可能性が考えられる。源氏と明石の入道の家との関係は、「故母御息所は、おのがをちにものしたまひし按察大納言のむすめなり」(須磨 二・二〇二―三)と、入道の父と桐壺の更衣の父が兄弟であることが示されているが、ここで改めて明石の御方自身の地位を固めておいたのであろう。そして、姫君入内という一時期を画する時にあつて薫物を通して朱雀天皇からの由來が必要になつたのである。

終 わ り に

梅枝の巻の薫物合わせにおいて、明石の御方の合わせた薫衣香は「前の朱雀院」に由來するが、これは宇多上皇を指すのではなく、古注の言うように薫物で知られた朱雀天皇と取るべきであると考えた。その方が薫物の達人である

公忠との君臣の關係が緊密と思われるからである。明石の御方の方が朱雀天皇に由来することは、明石の姫君の東宮入内にあたつて実母である御方の地位を固めるためである。これは、養母である紫の上の伝えた八条式部卿の方が源氏の伝えた仁明天皇の方を受け継ぐものであることと軌を一にするものである。

また、物語の朱雀院が史上の朱雀天皇に重なるとされることに對しても、重ねられているとは言えず、むしろ史上の天皇と関わりを持ちながらも、一線を画して物語の天皇の姿を自由に描こうとしていると考えられる。逆に言えば、史上の天皇と関わらせなければ、物語の天皇の姿をそのように描くことは出来なかつたであらう。これは他の天皇の伝えについて述べた部分を検討してみても分かることである。このように「前の朱雀院」には、『源氏物語』における史実と物語の關係の一端が示されていると考えられるのである。

(注 1) 本文の引用は、日本古典文学全集(小学館)により、冊数と頁数を示す。以下同じ。

(注 2) 全集、日本古典集成、『源氏物語評釈』、新日本古典文学大系、『源氏物語玉の小櫛』、池田亀鑑編『源氏物語事典上巻』。

(注 3) 全集 三・四〇一頁頭注。

(注 4) 『源氏物語事典上巻』二二六頁。

(注 5) 評釈、新大系、『一葉抄』。

(注 6) 玉上琢弥著『源氏物語評釈』第六卷・三三二頁。

(注 7) 新大系 三・一五七頁。

(注 8) 『源氏物語事典上巻』二二六頁。

(注 9) 『源氏物語玉の小櫛』本居宣長全集第四卷・四四五頁、『湖月抄』師説。

(注 10) (注 9) の宣長全集 四四六頁。

(注 11) 集成 四・二五九頁。

(注 12) 上巻・二二六頁。

(注 13) 玉上琢弥編『紫明抄 河海抄』の頁数を示す。以下同じ。

(注 14) 『薰集類抄』の引用は、群書類従第十九輯により、頁数を示す。以下同じ。

(注 15) 『花鳥余情』の引用は、源氏物語古註釈叢刊第二巻により、頁数を示す。以下同じ。

(注 16) 『源氏物語事典上巻』一五八頁。

(注 17) 群書類従第五輯 五六頁。

(注 18) 『源氏物語大成巻七 研究資料篇』 五六三頁。

(注 19) 『朱雀院のことと准拠のこと——源氏物語の世界——』(『源氏物語論集』所収 二四九頁 昭和四十六年十一月)

(注 20) 『孟津抄上』(源氏物語古注集成第四巻) 梅枝・二五一頁。

(注 21) 例えば、集成には、「引き続き、絵合の巻では、物語の朱雀院が醍醐天皇の次の帝であることを明かしているが、これは史上の朱雀院と呼称においても皇位継承の順においてもまったく一致する」(一・二九五頁 解説)とある。

(注 22) 『河海抄』には、「以桐壺帝擬延喜事已分明也不及異論」(絵合 三四六)とある。

(注 23) 新日本古典文学大系 二・一七九頁。

(注 24) 『源氏物語評釈』第三巻一九〇頁参照。